

◇ 近況：随筆 ◇

素人校長奮迅記（3）

浅井辰郎

素人校長も52年4月で後半に入った。書きたいことは山程あるが今回は予告した修学旅行や学年合宿を書こう。51年5月中旬関西への修学旅行の第1印象は修業旅行ではないかということ。東京駅を出てすぐ一生徒が「伽藍とは何ですか？」と来たときは「さすがに!!」と感激したが、どうもそのあとはサッパリである。昔昭和1ケタの頃は、道順に要点を印刷し、記入部分を大きく取ったポケット版のノートを常に手に持っていて、車窓観察や寺社見学にペンを置く暇がなかったのに、今やトランプか!!と感無量である。しかし「学習効果：団体訓練：親睦：楽しさ」の比率が私の全国調査では1.45：1.46：3.65：3.45割であるのに、この旅行のアンケートでは2.02：1.95：2.97：3.02割と学習に0.5割余高いから以って瞑すべきか？

第2の印象は美食旅行であったこと。初日のひる、室生寺下における9菜付の会席膳、翌日ひるの柿の葉ずし、夕方の義経鍋、4日目夕方のすきやき、5日目ひるの鉄鉢料理、車中の洋食弁当……は郷土色・質・量とも十二分である。アンケート調査でもこの6つはとびぬけて点が高いし、感想の中には「大変なごちそう旅行でした」と感激しているのがある。同感同感!!実際、全国調査では食事評は「普通」か「悪い」が多いのに、本校調査では「よい」「普通」が遙かに多い。詳しくは高校紀要23号（1978）を見られたい。

第3の印象は夜が女子生徒でも一騒動なのだ。京都で就寝後2人の生徒が他室へ行ったのを、同室の者が「外出!!」と慌ててご注進に来たため、7人の大人が深更、鳩首協議と相成った次第。そのためではあるまいが生徒1人が発熱して教官1、保健婦1が付き添ったので俄然他教官の負担が増し、校長自ら宿に駆け、東京へと電話しながら日程を続ける……という生々しい体験もした。

学年合宿とは1年生には内部外部入学者の懇親が主であり、2年生のは3年の修学旅行への橋渡しを目的とする。共通一次テストなどのため52年5月に私の同行したのが最後になるはずである。晴天下まことに快いバス車内の大合唱をサウンド8ミリで撮ったり、規律正しい宿舍の今市スポーツセンター 国旗掲揚を入れたり。2日目は霧降高原、東照宮、産業コース（酪農団地・線香・盆栽・苺）に分れてドライブ、夜は体育館で消灯時間一杯まで教官生徒一体の大演芸会。

正月になって次の賀状を1生徒から戴いた。「昨年5月の学年合宿の際には先生のいつもは拝見できない面を発見して感激致しました。今年の修学旅行もまたご一緒したいと思っております」と。ハテいつもは拝見できない面とは何？8ミリ気狂い？大掃除したこと？アッ、1人だけ食堂でお代りしたこと？まさか電灯を暗くして男の先生達と焼酎を酌み交したことは秘中の秘なのにとまれ、うれしい賀状でした。これでもしアンケート2種を生かした今年の新しい修学旅行を、終始見ることができるなら、こんな嬉しいことはないのだが。